

小説を書きたい、という気持ちと、小説を書くことを仕事にしたい、という気持ちはべつだと思ふ。小説はだれでも書ける。傑作も、だれでも書ける。一度か二度くらいなら。でも、それを、ずーっと続けるとなると話はべつだ。でも、それをしよう、したいと思う人がいる。私もそうだった。小説家というものに過度な付加価値をつけてその職業に就きたいと思つたのではない。小説をずーっと書いていたいと思つたのだ。アマチュアの書き手を対象とした新人文学賞は、小説をずつと書きたいと思う人のためにあるのだと思つていた。だから、新人文学賞を主催する側は、賞金や副賞とともに、「小説をずつと書けるようにする」条件を整えるものだと思つていた。

なんだか違うらしいと気づいたのは、たまたま自分がかかわつた新人文学賞に、その後の想定がまったくなかつたからだ。新人賞受賞後、次回作を発表する場もなく、担当編集者がつくわけでもない。

少し調べてみると、そういう文学賞はびつくりするほどたくさんあることがわかつた。きつと、小説をずーっと書きたい人のための賞ではなくて、小説を書きたい人のための賞なのだろうと納得した。生きているうちに、一度、二度、小説を書いてみたいな、と思う人のためのもので、それを願っている人も案外たくさんいるのだ。

小説を書いてみたいと思う人と、小説を書くことを仕事にしたいと思う人が、まったく異なることを、でも、どれだけの人が理解しているだろうか。新人賞の主催者も、もしかしたら応募者も、わかつていないのではないか。私もそもそもそんなことを考えたことはなかつた。でもその二者は、なにひとつ接点がない。そしていっしょにするべきではない。小説家、作家、というのは、肩書きのように思えない。便宜上、そのような言葉を使うけれど、でも、明日から一生何も書かなかつたら、そうした名称を使えないのだなと私は日々思つている。そう思うと小説家、作家、とは、職業名ではなく、「状態」により近い。おそろしいことだと思ふ。でもそのおそろしいことをしたいと願う人間がいる。その、おそろしいことをしたいと願う人間のための、門がある。編集なんてしたこともなく、できるはずもないのだけれど、私はこの貴重な機会に、いつもとは違う角度から、そのことを考えてみたい。